文化財をたずねて⑱

《石土神社》

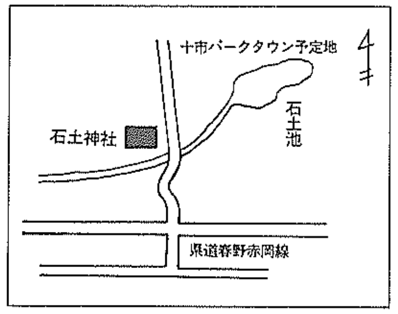
石土神社は、十市の阿戸にある。日本書紀の中には、伊弉諾尊が水に入り、磐土神を生んだと記されているが、この神が石土神社の祭神である。

続日本後記の中に、「承和八年（八四一）、土佐美良布神社・石土神社を官社にする」と記載されており、相当立派な社殿であったが、星霜をふるに従って荒れはて、祠所のみとなっていた。衰退を嘆く人々が、元禄時代に神社を再興し、面目を一新した。古来伊予の石鎚神社を奥の院ととなえ、当社を前の宮と呼んでいる。

前方には、阿戸の池が静かに眠り、後方にはカルストが続いている。また大きな岩の下には、石灰洞があり、鍾乳洞や石筍が入洞をこばみ、奥を極めたものはない。

昔、峰寺に名犬があり、「八葉山手飼」という木札を、首輪につけてあった。ある時この犬が、うさぎを追い出した。逃げ場を失ったうさぎは、とうとうこの洞窟にはいり、七日後、伊予の吉田の石灰洞で、二匹が死体となって横たわっていたという。これも洞窟の深さを物語るエピソードである。

いろいろな逸話が残る由緒ある石土神社



地元のかたのお話

●子どもの頃は、神社の前の川も澄んでいて、この辺はとても良い遊び場でした。

裏の洞窟にも何度か入り、途中十畳ぐらい広いところもありますが、道が分かれ狭くなっているので、奥まで行き詰めたことはありません。でも、一番もぐったときは百メートルぐらいは入ったと思います。

今は、土佐日記の大湊跡は前浜説が有力ですが、十市の人は皆、ここが大湊跡と信じています。裏の洞窟の形は海水による浸食ですし、中からウニの化石が出たこともあり、ここまで海が迫っていたことは確かです。

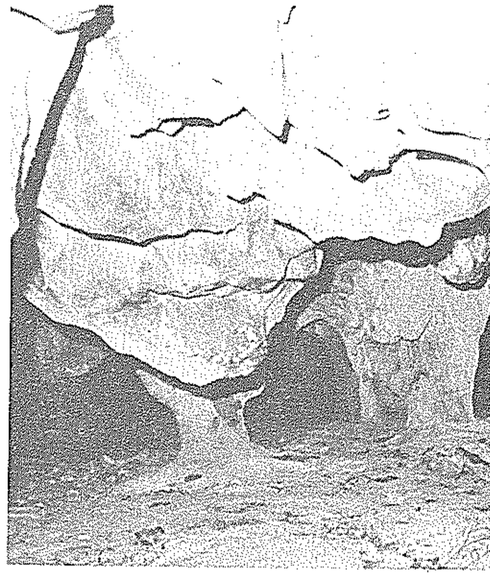
細川二三子さん

●あの洞窟には、蛇が住んでいて毎晩のように、峰寺の燈明の油をなめに山に登ってゆき、その体を引きずる音が無気味に響いたそうです。

この神社の神さまはとても芝居好きで、神祭には三日間も奉納歌舞伎を、地元の人たちが行っていました。また、おなばれ（神輿が出ること）のときはいつも日和が良く、子ども心に、きれいな着物が着ていけると思い楽しみでした。

現在、お参りに来る人は、西は土佐清水から、東は甲浦までおり、とてもありがたい神さまと、皆さんに信仰されています。

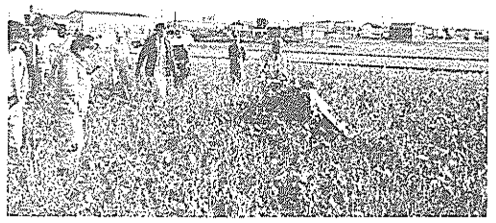
北村　博さん



蛇が住んでいたと伝えられる石灰洞

普及所から⑭

大豆をもっと食べよう



市内では、水田転作により大豆が約百七十ヘクタール栽培されており、十一月下旬に収穫されます。

大豆の主成分は、タンパク質と脂肪です。中でも、三四%も含まれているタンパク質は、アミノ酸組成が動物性タンパク質によく似ており、「畑の肉」と言われてきた事がうなずけます。また、脂肪は一七%で、コレステロールを下げる働きをするリノール酸を多く含んでいます。その他、不足しがちなビタミンB群も多く、栄養豊かな食品といえます。

昔から大豆は、煮豆、豆腐、納豆、みそ、しょうゆなど、いろいろに利用されてきました。最近コレステロールが問題になり、また、日本型食生活の見直しがいわれている折から、この大豆のように高タンパク質、低糖質、植物性脂肪の食品が脚光を浴びてきました。もっともっと食卓にのせるように、心がけてほしいものです。

利用面では、農協婦人部を中心に、自分たちの生産した大豆を使い添加物の入らない「安全でおいしいみそ作り」が盛んに行われていますし、生活改善グループでは豆腐作りも勉強するなど、自家生産大豆の利用も広範囲になってきました。

今月は、家庭で簡単にできる豆腐の作り方を紹介しましょう。

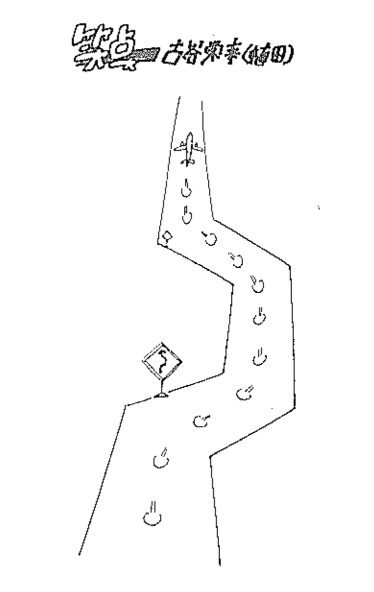
〈材料〉（三丁分）

大豆三カップ、塩化マグネシウム（凝固剤）大さじ一、水三リットル

〈作り方〉

①大豆を一晩水につける②水を加えミキサーにかける③鍋に移して火にかけ、三分程煮立てる④こし袋で絞り、オカラと豆乳に分ける⑤豆乳を火にかけ、八十度になったら、凝固剤を入れる⑥固まり始めたら型に流し、軽い重石をする⑦三十分程おき、好みの大きさに切る。

【南国農業改良普及所】



田村遺跡を残してくれたら

南国歌壇

看とり呉るる子の無き人に付き添いて　心よせあう病棟の秋
岡豊町　葛目治子

夫の忌の近づきて山の奥津城にぬかずけば秋の風は冷たき
植野　中司愛子

主なき畯け伏屋も秋深み紅葉音なく池の面に散る
立田　池田小村

家並に蕾ふくらむ椿垣何紅つくや再来なき路
下野田　徳久まさみ

今朝もまたシートベルトを締めて出づ　現役路線をなおも行く夫
仏岩　島本　栄

杖つきて登る吾なり若き等は早くも剣山に歓声あぐる
里改田　楠瀬米井

南国柳壇

除夜の鐘幸か不幸の除幕式
十市　大家寿恵子

いたずら子コスモスだけには手を出さず
三畠　井沢正子

彼岸花間違はず咲く墓参り
立田　北村幸江

身内なく先が気になる独り者
十市　森尾　環

南国俳壇

芦原が終点となる鰯雲　岡田寿子（花梼俳句会）
古希祝す芒は千の騎士となり　楠瀬秀子（〃）
上背の女晩夏の訪問者　岡田昌子（〃）
職去って日々愛しめり煮大根　山崎勝子（大篠俳句教室）
ひがん花発火　それからの村　痩せて森　洋彦（〃）
遅進児と呼ばれ　砂文字消してゆく　山崎光子（〃）
庭師来てだまり勝なる松手入　大谷みえ（柿の実会）
鵙低く舞い一山の小春かな　井上さえ（〃）
たなびける煙は神の留守の森　公文ちえ（〃）